13　「恋路ゆかしき大将」　─中世の擬古物語

18年度　明治大学

★　次の文章は「恋路ゆかしき大将」の一節である。恋路関白の妻である女二宮は出産が近づき、陣痛に苦しんでいた。そこで、女二宮の異父兄で恋路関白とも懇意にしている花染右大将（大将）が、戸無瀬の院にいる無言の聖に加持祈禱を依頼する。これを読み、後の問に答えよ。

　かく言ひつつ五六日にもなりぬ。まことに今は亡き人１の御さまなるは、言はん方なきわざかな。山々寺々に験ある僧求め尋ねらるれど、さらにかひなきに、戸無瀬の院にさぶらふ無言の聖といふ者を、大将の君召したり。何事をいかにと言ひ知らすれど、ただうちうなづきて①返事をせぬは、いみじうＡいぶせけれど、院の中をあちこちしありきて、物を求むるやうにすれば、とかかくかと言へど、また音もせず、たち騒ぎたる中を分けありきて、井のもとへゆきて、手づから汲みつつ飲むさまも、Ｂ現の人とは覚えず。大将をはじめ、こなたへあなたへと騒ぎ導き給へど、いとも騒がず、ただ目うちたたきて、何事そらと思ひたるけしきなり。からうして②御帳の傍らへ召し寄せて、さぶらはせ給ふに、２加持参る声おびたたしく澄みのぼりて、大山も崩るばかりなるに、御物の怪どもあらはれて、さまざまののしる中に、おとなしやかなる女房に移りたる御物の怪のさま、並み並みの際とは見えず。

（物の怪）命こそ野辺の　ａ　とは消えしかどくゆる　ｂ　はなほぞまされる

髪振りかけ、恥ぢらひてＣ物言はまほしげなるに、３わざと封じ籠めさせ給ひて、あひしらふ人なし。

　この紛れにぞはなやかに泣き出で給へる。の上急ぎ見Ｄたてまつり給へば、女にておはします。、をととひにや、俄かに入らせ給へりし、今ぞ御心鎮めて帰らせ給ひつるに、とりあへず参りたる。皆人心ち鎮めて扇うち使ひたるけしきども、Ｅおのが功名顔なり。Ⅰかかる紛れに、Ⅱ無言の聖はかき消ちて見えず。いかなる禄をいかさまにと思しつるに、かひ無ければ、急ぎ戸無瀬へ尋ねたてまつれば、いとＦさりげなくてぞさぶらひける。「禄もよろこびもさらにかひ侍らじ。さもあらば、Ⅲここをさへ疎み侍りＸなん」と聞こえ返し給へば、飽かず誰も思す。五夜七夜の御遊び、所々の、児の御衣に結び付けられたる歌ども、いくらも聞き侍りしかどうるさくてＹなん。の出できさせ給へらん儀式はなほ例の事にて、これほどめづらかに光殊なる御式はなくやとぞ、時の人申し侍りける。

〈注１〉大殿の上―恋路関白の母。

〈注２〉院―女二宮の父。

〈注３〉―誕生時に天皇から授けられる刀。ここでは祖父にあたる院から授けられた。

〈注４〉入道大殿―戸無瀬入道。花染右大将の父。

〈注５〉御産養ひ―誕生した子どもの多幸を祈って行われる祝宴で、三日、五日、七日、九日にあたる夜に催される。

〈注６〉今上一宮―現在の天皇の子ども。

問１　傍線部①②の漢字の読みをひらがな（現代かなづかい）で記せ。

①［　　　　　　　］　　②［　　　　　　　］

問２　傍線部Ａ「いぶせけれど」の意味として最も適切なものを次の１～５の中から一つ選べ。

１　生意気だが　　　　２　不真面目だが

３　みすぼらしいが　　４　ふてぶてしいが

５　気にかかるが

問３　傍線部Ｂ「現の人とは覚えず」の解釈として最も適切なものを次の１～５の中から一つ選べ。

１　立派な人とは思えない　　　　２　夢の中の人とは思えない

３　今の時代の人とは思えない　　４　気の確かな人とは思えない

５　眠っている人とは思えない

問４　空欄　ａ　・　ｂ　に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の１～５の中から一つ選べ。

１　ａ　花　　ｂ　匂ひ　　２　ａ　魂　　ｂ　心

３　ａ　空　　ｂ　思ひ　　４　ａ　雨　　ｂ　霞

５　ａ　露　　ｂ　煙

問５　傍線部Ｃ「物言はまほしげなるに」を現代語訳せよ。

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問６　傍線部Ｄ「たてまつり」は誰に対する敬意を示すのか。最も適切なものを次の１～５の中から一つ選べ。

１　女二宮　　２　無言の聖　　３　恋路関白の子

４　物の怪　　５　大殿の上

問７　傍線部Ｅ「おの」とは誰をさすか。最も適切なものを次の１～５の中から一つ選べ。

１　女二宮　　２　無言の聖　　３　大将

４　女房達　　５　入道大殿

問８　傍線部Ｆ「さりげなくて」とほぼ同じ様子を述べている箇所を本文中から十二字（句読点も一字と数える）で抜き出して記せ。

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

◎問９　本文の内容に合致しているものを次の１～５の中から一つ選べ。

１　陣痛で苦しむ女二宮を前にして右往左往する恋路関白や大将を見かねたのか、院と入道大殿がやって来た。

２　女二宮の出産後、無言の聖が褒美ももらわず戸無瀬へ戻ってしまい、皆は物足りない気持ちになった。

３　今上と恋路関白の子はほぼ同時期に生まれたため、恋路関白は今上に対抗して儀式に莫大なお金をかけた。

４　霊験あらたかな無言の聖が加持祈禱を大声で行ったところ、大山が突如として崩れ、女房達を怖がらせた。

５　物の怪は加持祈禱の声に怖気づき、正体が身分の高い女性だと暴露されて、入道大殿を恨みながら消えた。

【確認問題】

１　二重傍線部Ｘ・Ｙの「なん」の文法的説明として適当なものをそれぞれ次から選べ。

ア　強意の助動詞＋推量の助動詞

イ　動詞の活用語尾＋推量の助動詞

ウ　終助詞　　エ　係助詞

Ｘ＝［　　　］　Ｙ＝［　　　］

２　波線部１の格助詞「の」の文法的意味として適当なものを次から選べ。

ア　主格　　　　　イ　同格

ウ　連体修飾格　　エ　比喩

３　波線部２「加持参る」の意味として適当なものを次から選べ。

ア　加持のために参上する

イ　加持のための僧をお呼びする

ウ　加持をして差し上げる

エ　加持をする僧がいる

４　波線部３「わざと」の本文中での意味として適当なものを次から選べ。

ア　わざわざ　　イ　ことさら

ウ　故意に　　　エ　いつまでも

【補充問題】

５　傍線部Ⅰ「かかる紛れ」の内容として適当なものを次から選べ。

ア　物の怪が恨んで大声で騒ぎ立てること。

イ　女二宮が無事に女子を出産したこと。

ウ　世継ぎの男子誕生を人々が喜ぶこと。

エ　物の怪が恨みを込めた歌を詠んだこと。

６　傍線部Ⅱ「無言の聖はかき消ちて見えず」とあるが、「無言の聖」がそのようにした理由はどのような思いがあったからか。本文中から十五字で抜き出せ。

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

７　傍線部Ⅲ「ここ」の指す内容として適当なものを次から選べ。

ア　戸無瀬の院　　　イ　宮中

ウ　恋路関白の邸　　エ　世の中

【解答】

問１　①＝かえりごと　②＝みちょう

問２　５

問３　４

問４　５

問５　ものを言いたそうだけれども

問６　３

問７　４

問８　何事そらと思ひたるけしき

問９　２

【確認問題】

１　Ｘ＝ア　Ｙ＝エ

２　エ

３　ウ

４　イ

【補充問題】

５　イ

６　禄もよろこびもさらにかひ侍らじ

７　ア

【現代語訳】

　このように言いながら五、六日も経った。（女二宮が）本当に今は死んだ人のようなご様子であるのは、言いようもないことであるなあ。山々寺々に（祈禱の）霊験がある僧を探し求めになったけれども、まったく（探す）かいがない（と思う）頃に、戸無瀬の院にいます無言の聖という者を、大将の君はお呼びになった。なになにをどのようにと言って知らせるけれど、ただうなずいて返事をしないのは、たいそう気にかかるが、院の中をあちこち歩き回って、（何か）物を（探し）求めるようにするので、あれかこれかと尋ねるけれど、（聖は）また何も言わず、（人々が）騒いでいる中を分け入り歩き回って、井戸のところへ行って、自分の手で（水を）汲んでは飲む様子も、気の確かな人とは思えない。大将をはじめ、（人々が）こちらへあちらへと騒ぎ案内なさるけれども、（聖は）少しも騒がず、ただまばたきして、何事かとなんとなく思っている様子である。やっとのことで（女二宮の）御帳の傍らに呼び寄せなさって、お控えさせなさると、加持をして差し上げる声が非常に大きく澄み上って、大きな山も崩れるほどであるところに、御物の怪どもが現れて、様々大声で叫ぶ中に、大人びた女房に乗り移った御物の怪の様子は、並々の身分とは思われない。　  
　　　（私の）命は野辺の露のように消えてしまったけれども、くすぶりのぼ

　　る煙（のように私の思い）はやはり一層増してくる。

（物の怪は）髪を（顔に）振りかけ、恥ずかしそうにしてものを言いたそうだけれども、ことさら封じ込めさせなさって、受け答えする人はいない。

　この（騒ぎの）紛れの中で大声で泣き（お腹の中から）出ていらっしゃった。大殿の上が急いで見申し上げなさると、女の子でいらっしゃる。院も、一昨日であろうか、急にお入りになったが、今はご安心してお帰りになった（その時）に、なにはさておき御佩刀を差し上げた。みんなも安心して扇を使っている様子などは、（いかにも）自分の手柄であるような態度である。このような取り込み事の中、無言の聖はいなくなって（姿が）見えない。どのような褒美をどのように（与えようか）とお思いになっていたのに、どうにもならないので、急いで戸無瀬へお尋ね申し上げると、まったく何気ない様子でいました。「褒美もお礼もまったくどうにも価値がないでしょう。もしそのようなことがあれば、ここ（にいること）までもきっと嫌でございましょう」と入道大殿はお断り申し上げなさるので、もの足りなく誰もがお思いになる。五夜、七夜の宴での管絃の御遊び、あちらこちらの御産養いの宴、子どもの御産着に結び付けられた歌など、いくつも聞きましたが（一つひとつ記すのは）面倒で（省略します）。現在の天皇の子どもがお生まれになるような儀式はやはりいつもどおりの事で、これほどめったになくご威勢が格別な御式はないのではないかと、その頃の世間の人は申しました。